

作家
学校法人自由学園理事長
水木 楊
みずき よう



「本の読み方は」

本の読み方は、年代によってどうやら異なるようだ。若い頃は手当たり次第に読んで。ドフトエフスキーの「罪と罰」やトルストイの「戦争と平和」、ロジュー・マルタンデュガールの「チボリ家の人々」などの大作も二気に読んで。夏目漱石、島崎藤村、太宰治、芥川龍之介、森岡外、田山花袋……日本の小説も殆ど読んで。経済書ではアダム・スミスやリカード、マシーナルなども翻訳書ではあるが、読破した。エネルギーがあり余っていたのだ。

だが、夜討ち朝駆けに追われる新聞記者になつてからは、仕事で役に立つ本が読書の中心になつてしまった。読みたい本よりも、読まなければならない

本で精一杯になったのだ。

その場合でも、読み飛ばす本とじっくり読む本とに分かれる。読み飛ばす本は、「ながら族」で、電車や風呂の中などで読む。必要な部分に赤い線を引くから、古本屋では売れない。

そんな時代が過ぎて、作家として一本立ちしてから、読まなければならない本に読みたい本も加わつた。昔読んだ本をもう一度ひっくり返してみることも多くなつた。

いま、七十三歳となり、老境とも言える年代を迎え、ふと気づくと、もう大作を読破するエネルギーは失われつつあることに気づく。読み出しはするのだが、文中にあることに引かれて、一気呵成というわけにはいかず、途中で他のことを考え始めてし

まつた。

考えてみれば、人間付き合いと同じである。新聞記者の現役時代には会いたくない人にも会わなければならないが、歳を取ると、会いたくない人には会わないようになる。それで済んでしまふのだ。だから、枕元には読みたい本だけが積んである。本は寝ながら読むことが多い。

ところが、その読みたい本がまたうす高く溜まる。ときどき崩れて頭に降りかかってくる。まるで「早く読め」と叱られているようだ。仕方なく、ときどき整理する。すると、六十歳を越えてから今にいたるまで、読みたい本そのものが変わってきていることに気づく。これから先、どのように変えていくのか。読書はまさに、その人の歴史である。



図書館通信

トピックス

- 巻頭言 作家／学校法人自由学園理事長 水木楊・・・1ページ
- 図書館と私 池袋図書館運営専門員 狩野住江・・・2ページ
- ザ・レファレンス 郷土資料館学芸員 秋山伸一・・・2ページ
- 生涯の二冊 豊島区図書館経営協議会委員 栗原由美子・・・2ページ
- 中学生職場体験から・・・3ページ
- 赤い鳥文学堂の終了にあたって(2) 小峰紀雄・・・3ページ
- 豊島区伝説工芸 漆工芸 橋本允宏・・・3ページ
- 図書館イベント情報・図書館カレンダー・・・4ページ

第19号
季刊(冬)
2011

R100
本館定休日(9時～18時)を併用しています



発行 ● 豊島区立中央図書館
東京都豊島区東池袋四一五二一
ライオンビル四階・五階 〒113-8441
電話 ● 〇三―三九八三―七六八六
FAX ● 〇三―三九八三―九〇四
ホームページ ● <http://www.library.toshima.tokyo.jp>
発行日 ● 平成23年一月

新航路 [17]

新年明けましておめでとうございます。

さて、昨年は「国民読書年」でした。皆さんは多くの本をお読みになったでしょうか。読んだ人も読めなかった人も、新年のスタートに合わせ、新たな気持ちで本と向き合ってください。

ところで、先日こんな詩をウェブサイトで見つけました。ある小学校の校長先生のお話しに出てくるものです。

読書で心を豊かに

読書は心の栄養

よい本を読めば、
やさしい気持ちが心にたまる
ただしい気持ちが心にたまる
強い力が心にたまる
広い知識が心にたまる

すばらしい本との出会いは心を豊かにしてくれます。今年も本のある生活で心にたくさんの感動をためませんか。図書館では皆さんのご来館を職員一同お待ちしております。本年も豊島区立図書館を、どうぞよろしく願いいたします。

豊島区立中央図書館長 鈴木 達

Current & Encounter

「人間社会への儀礼と格式について」

豊島区図書館行政政策顧問 粕谷 一希

伝統を考える

中央図書館のすぐ近く、グリーン大通りに面して豊島岡女子学園がある。その校長は二木謙氏であるが、同氏はながく国学院大学で日本史の教授をされた。これはめずらしいテーマで、経済史・政治史・社会史の研究者が多いなかで変った存在である。折口信夫を出した国学院大学であればこそできたことなのだろう。

日本の武家社会は鎌倉以来だが、室町時代に大きく様相を変え、戦国時代には、それまでの地頭大名が減り、戦国大名が全国を制覇する。この戦国時代は誰しも死を覚悟した明日もわからぬ社会だった。

その中で、茶や花が珍重され、儀礼・格式が重んじられた。そのことを抜きにしてのちの武士道の観念は生まれてこなかったろう。

人間、死を前にして、儀礼・格式に拘ったのは、それを別にして、人間の生死を納得する方法がなかったからなのだろう。儀礼・格式こそ、人間社会の伝統を形成してゆく核心である。そしてこのことは、形を変えて今日でも生きている。人間という不確かな生物が共同体を形成して、幾世代にもわたって生き続けているのは、人間関係を拘束するものとして儀礼・格式があるからである。冠婚葬祭といった仕切りは、人間の智慧が生み出した工夫なのだろう。

ところで、その読みたい本がまたうす高く溜まる。ときどき崩れて頭に降りかかってくる。まるで「早く読め」と叱られているようだ。仕方なく、ときどき整理する。すると、六十歳を越えてから今にいたるまで、読みたい本そのものが変わってきていることに気づく。これから先、どのように変えていくのか。読書はまさに、その人の歴史である。

お祭りの楽しさ

いまや、家族や地域社会、学校、病院、神社、佛閣といったものまで崩壊しかかっているが、それだけにそのシステムがよく見えてくる。いまや必要なのは革新ではなく、伝統の保守かもしれない。

鬼子母神の御会式は毎年賑やかだが、戦前からの祭りであつて子供たちが忘れがたい。各地から万灯が集まってくるが、その中には池上の本門寺からのものもあつて驚嘆したことがある。境内中に商店が並んで、金魚すくいから綿菓子まで子供たちの目を奪った。戦前には口口首という不思議なものまであつて怖かったが楽しかった。

こうした何げないお祭りにも、人間の智慧の結晶が詰まっている。インテリはみんな逃げて歩いたものが、三島由紀夫がハッピーを着て万灯をかかげたことがあつた。彼一流の問いかけだが、たしかにみんな万灯をかかげる気持ちになつてみることも必要かもしれない。

有職故實という言葉があつた。昔は「クダラン」と考えていたが、武家たちがこそ求めてたという儀礼が、なぜ必要だったのか、最近になって少しずつ解りかけてきた。そうした支えがなければ、人間社会は秩序を保てなかつたのである。戦国時代、武家社会がひっくり返り、生と死のストレスの間を生きた人々が、その残酷さを身にしみて解つたからこそ、儀礼を求めたのだろう。今日もそのことと似ていないだろうか。

水木楊(本名・市岡陽一郎) 昭和12年上海生まれ。昭和35年4月 日本経済新聞社入社、ワシントン支局長、取締役論説主幹などを歴任。平成11年4月に退社、作家として独立。平成21年4月 学校法人・自由学園理事長に就任。『会社が消えた日』(日本経済新聞社)、『北京炎上』(文芸春秋社)など著書多数。

生涯の一冊
(18)豊島区図書館経営協議会委員
栗原 由美子

「心の故郷」

家の本棚には、子供の頃「お気に入り」だった本を文庫本で揃えた特等席があり、モンゴメリのアンシリーズ(村岡花子訳)も、和紙で作ったブックカバーをかけて並べてある。(上記写真参照)

私が「赤毛のアン」を初めて読んだのは、小学校の低学年の頃だったと思う。河出書房「少女少女世界の文学」という全集のうちの1冊で、「赤毛のアン」が「若草物語」と合本になっていた。訳者は曾野綾子で、沢山ある訳本の中では一番文字数が少ないらしいので、抄訳だったのかもしれない。小学生の頃は、いつでも未読の読みたい本が沢山あり、

同じ本を繰り返し読むということをおもしろしなかった私だが、読む本が無くなってしまう週末などは、うちの本棚から河出書房の大型の本を引っ張り出して読んでみた。中でもアンは、その空想好きところが自分と似ていて、大好きだった。

中学・高校時代は、童話などは卒業した気であり、背伸びをして、所謂「子供の本」からは遠ざかっていたが、大学受験を控えた高3の秋、今から思えば現実逃避でしかない気まぐれから、「赤毛のアン」を久しぶりに読んでみた。そうしたら、今までどこで眠っていたのかと思うくらい、あうという間に大好きだったアンが心の中に蘇ってきて、まるで何年か振りで故郷を訪れたかのような懐かしさと嬉しさが

心に満ち溢れたものだ。すると、アンに続いて、ジルシャ・アボット、カッレくん、ジョー、コロボックル達といった、小学生の頃大好きだった本やその主人公が次々と心の中に現れて、それまで思い出すこともなかったけれど、私の心の奥底で、彼等はずっと思っていたんだなあ、胸が熱くなった。その時私は、「子供の頃に読んだ本は、心の故郷なんだ」と悟ったのだ。

この度、二十数年ぶりにアンシリーズを読み返してみても、「赤毛のアン」が執筆から百年経っても色褪せず、今尚読み継がれているのは、このシリーズが、人間の本质を見抜き、人生への洞察に満ちているからなのだと気付いた次第である。

図書館と私 ⑥

本とともに

本は、いとも簡単にいろいろな世界に私を誘ってくれる。それは、時空を越えた旅であったり、そっとやさしく人生について語りかけてきたりと。多くの本と出会い、そして本とともに歳月を重ねてきた。本には、計り知れない無限の広がりがあり、言い尽くさないほどの魅力で私を夢中にさせ、尽きることのない好奇心を満たしてくれる。本との語らいは、深い感銘や喜びの連続である。

過去に遡れば、本は先人たちにより、各地域でそれぞれの時代の記録などが綴られて生まれしてきた。気が遠くなるような膨大な時間をかけて作成されたであろう各時代の本は、一部ではあるが、当時の姿を残しながら貴重な財産とし

て今日大切に受け継がれている。研究とは無縁である私でも、古代の文明や英知などが再び本を通して学ぶことができることに、今更ながら感謝の気持ちでいっぱいになる。情報化社会といわれる現代であっても、情報を選びぬかれ、そして凝縮されて文章として書き記されている本の役割は、けっして薄れることはない。

著者をはじめ編集者、装丁家、印刷・製本など実に多くの手を経て出版される一冊の本には、様々な思いが込められている。その思いがたくさん詰まった図書館を利用していただき、本とともに過ごす生活で一人でも多くの人が心豊かな人生になるよう、私自身、日々研鑽を積み重ねればと思っています。

ザ・レファレンス

—豊島区の歴史・文化がわかる本④—

ご案内：秋山 伸一(あきやましんいち) 郷土資料館 学芸員

昨今のレトロブームの影響もあってか、昭和30～40年代に撮影されたなげない区内の風景写真を探すために、郷土資料館を訪れる方がいらしゃいます。多くは報道・出版関係者ですが、なかには町会の歴史をまとめるため、あるいは学校の記念誌を作るため、といった区内在住・在勤者からの問い合わせも時々みられます。

さて、デジタルカメラを安価で購入できる現在とは異なり、今から40～50年前の時代、カメラ(もちろんフィルムカメラ)は一般家庭にとって高価であり貴重なものでした。その用途は、家族旅行に出かけた際の記念写真や、子どもの学芸会、運動会といった家族のイベント、七五三、誕生日といった人生の節目の行事の時に撮影される場合が多く、自宅そばの風景を、しかも人物なしで撮影することはまずなかったと思われます。つまり、昭和30～40年代の風景写真を探し出すことは意外にむずかしい作業なのです。

そうしたなかで、『写真でみる豊島区50年のあゆみ』、『写真にみる豊島60年のあゆみ展』、『TOSHIMA2002—としま街博物館—』には、かつての風景写真が多く収められています。いずれも区制施行〇〇年という記念誌的な側面が強いものですが、むかしの区内の街並みや景観を知ることができるため、長年にわたり豊島区の移り変わりを見てきた方にとっては、「ほう、な

豊島区内の古い写真を探しているのですが…?

つかしいね～」、「ここは今のどこだ…?」という具合に楽しめる内容となっています。また、写真とともに豊島区の歴史についての解説が付されているので、明治時代以降の豊島区地域に関しての概略をビジュアル的に知りたいという方にもお勧めです。

なお、こうした書籍に掲載されている写真をご自分で眺めて楽しめる場合は問題ありませんが、印刷物に掲載されている写真には著作権を伴うことが多いため、写真の複製を作ってそれを別の印刷物等に使用される場合は、発行者や編集者に確認を取ることをお勧めします。

また、昭和30～40年代、あるいはそれ以前に撮影された区内のなげない風景写真をお持ちの方は、ぜひ郷土資料館(電話:3980-2351)までご連絡をお願いします。

【追加情報】

地元新聞である『豊島新聞』(週1回発行)で連載されているコラム「遺跡とところどころ」では、東池袋にあった巣鴨プリズンや、西池袋に居住した江戸川乱歩についてなど、豊島区ゆかりの事項や人物を詳しく取りあげています。本欄ではこれまでご紹介しませんでした。『豊島新聞縮刷版』を閲覧すると、これらの連載記事をまとめて読むことができるため、区内の歴史・文化をより深く詳しく知りたい方にはお勧めです。

あうるすぽっとからのお知らせ

『デンキ島』シリーズ連続上演企画

注目を集める若手劇作家・演出家「蓬莱電太」作の『デンキ島』シリーズを『モダンスイマーズ』と『道学先生』の二つの劇団が連続上演。夜になるとイカ釣り漁船のランプが闇に浮かびあがる北陸の島(デンキ島)を舞台にした物語。それぞれ独立したストーリーをもちつつ、共通の舞台背景、登場人物を描きシリーズならではの楽しさも味わえる企画です。

モダンスイマーズ公演『デンキ島～松田リカ篇～』

閉鎖的な島で新たな世界と希望を模索しながら生きる、若者たちの青春群像劇
日程 2011年3月9日(水)～16日(水)
作・演出：蓬莱電太 出演：前田亜希 ほか
料金(前売)3,800円

劇団道学先生公演『デンキ島～白い家篇～』

演出に大谷亮介を迎えて、葛藤や男女の微嚙を熱く描く中年世代の群像劇
日程 2011年3月20日(日)～27日(日)
作：蓬莱電太 演出：大谷亮介 出演：山本亨 ほか
料金(前売)4,500円

※2公演セット券有：7,500円

詳細・お問合せ あうるすぽっと 03-5391-0751 <http://www.owlspot.jp/>

中学生職場体験から

豊島区立中学校では、2年生になると学習の一環として5日間の「職場体験」があります。図書館も体験職場として、中学生を受け入れています。

今回ご紹介させていただくのは、昨年の5月に中央図書館で体験していただいた生徒さんの保護者の手記です。(ご本人の意向により、お名前は伏せていただきます)

娘が実習をしたのは、豊島区立中央図書館内の点字図書館「ひかり文庫」でした。毎朝、お弁当を自分で作ってから、杖をついて単独歩行で「出勤」という、正に“就職した時さながら”の5日間でした。娘が「中央図書館ひかり文庫」へ職場体験に行かせて頂き、ひとまわり大きく成長して帰宅してきたことに、夫婦で大変驚き、また心から嬉しく思いました。

実は実習先の希望を出す4月初め、思いもかけなかった問いを娘から突きつけられ、私達親は途方にくらっていました。これまで私達は、「目が見えなくても、一緒なんだよ。だから学校もみんなと一緒に。何でも挑戦してみようね!」と話してきました。娘はその言葉通り、学習支援者の方々にサポートして頂きながら、素直にまっすぐに様々なことにチャレンジしてきました。ですからこのまま、「職場体験実習」でも、ためらうことなく進んでいくものと、私達は思っていたのです。

ところが娘は「私に出来ることなんて、あるの?」と私達に問いかけてきました。それは、鋭い問いでした。視覚障がい者の就職状況は依然として厳しく、そこに不況が追い討ちをかけています。娘の問いはまるで、「“みんな一緒”なんて、キレイごとじゃないの?」と、私達に突きつけてきているように思えました。オタオタしてしまい、

ただお茶を濁すばかりで、きちんと答えることが出来ずにいた私達…そうしたとき、担任の先生からも、実習先について相談を受けました。先生は、「娘さんが実習先に行つて、ただ座らされている…ということでは意味がないと思います。彼女が出来る仕事のある、実習先を探したいと思っています」と。その答えが、「ひかり文庫」だったのです。

実習が始まって、娘は毎日イキイキと通うようになりました。覚えてきたこと、初めて知ったこと、段々上手になること等々、「私に出来ることがある!」と実感できたことが、彼女の心を輝かせているようでした。親である私達には答えることが出来なかった問いに、「ひかり文庫」のスタッフの方々が、学校の先生が、答えてくださった!…私達も胸が一杯の5日間でした。

全盲の中学生を受け入れ、体験プログラムを組むにあたっては、お忙しい中大変な労力をお掛けしたと想像致します。おかげさまで娘は、親には教えられなかった「自信」を取り戻すことが出来ました。これは、これからの人生を歩んでいく大きな宝物となると思います。本当にありがとうございました!

以上のような手記をいただき、受け入れて良かったと図書館員一同感激いたしました。正直、受入れの際にどのようなプログラムにするか「ひかり文庫」では悩みましたが、「案ずるより産むが易い」で「とにかくやってみよう」という気持ちで迎え入れました。これからは「自信」を「確信」に変えて、今まで以上に何事にも積極的に取り組み、自ら考えて行動する人になってほしいと思います。図書館(ひかり文庫)はいつも応援しています。ありがとうございました。

赤い鳥文学賞 の終了にあたって (2)

赤い鳥の会世話人 株式会社小峰書店社長 小峰 紀雄



1971年坪田譲治先生を世話人代表にして「赤い鳥の会」がつくられました。「赤い鳥の会」の目的は、1918年に創刊された鈴木三重吉主宰による雑誌「赤い鳥」の「功績を今日に受け継ぎ、児童文学のより豊かな実りに期待する」というものでした。雑誌「赤い鳥」は、日本の近代児童文学の先駆になった文学運動です。

「赤い鳥の会」は、二つの事業に取り組まれました。「赤い鳥文学賞」を新設し、赤い鳥に関する出版物を発行することでした。

「赤い鳥の会」には、前史的な事業があります。敗戦直後の1948年坪田譲治・木内高音・与田準一編「赤い鳥童話名作集初級・中級・上級」全3巻が小峰書店から発行されました。敗戦によって日本の出版状況が、大きく変わった時代です。出版法、新聞紙法など戦時中からの統制が解除され、出版活動が活発になり、子どもの本の出版も息を吹き返しました。本書は、鈴木三重吉13回忌の墓前に供えるものでしたが、戦後児童文学の再出発を画する出版物の一つになりました。その後、継続的に赤い鳥に関する出版物が、主に小峰書店から発行されました。1949年与田準一・巽聖歌編赤い鳥童画集『からたちの花』(画・深沢省三・深沢紅子)「う

【プロフィール】

1938年宮城県に生まれる。早稲田大学第一文学部卒業。小峰書店編集部長を経て、1986年同社社長に就任、現在に至る。赤い鳥の会世話人。(社)日本書籍出版協会理事。

たをわすれたカナリヤ」(画・武井武雄・初山滋・川上四郎)。1954年～55年坪田譲治他編『学年別赤い鳥シリーズ』全6巻(1979年～80年、2008年新装版)。1958年安倍能成・小宮豊隆監修・坪田譲治・与田準一・鈴木珊吉・森三郎編『赤い鳥代表作品集初期・中期・後期』全3巻(1998年新版全6巻)。1982年赤い鳥の会編『赤い鳥名作童話』全11巻。1983年赤い鳥の会編『「赤い鳥」と鈴木三重吉』。1988年～97年赤い鳥の会編 赤い鳥文学賞・新美南吉児童文学賞受賞作家の創作シリーズ『赤い鳥文庫』全17巻。2004年新美南吉の会編『新美南吉童話傑作選』全7巻。2005年坪田理基男・松谷みよ子・砂田弘編『坪田譲治名作選』全4巻。

赤い鳥文学賞(1983年新美南吉児童文学賞、1987年赤い鳥さし絵賞を併設)は、「過去1年間に発表されたすぐれた児童文学作品」に贈られましたが、「赤い鳥の会」の運営と賞の選考は坪田譲治先生を中心に「赤い鳥」の文学精神を継承する作家、詩人の方々によって受け継がれました。設立から40年。創立時の世話人坪田譲治、鈴木珊吉、巽聖歌、与田準一、小峰広恵の各氏をはじめ、「赤い鳥の会」の活動を志と情熱をもって支えた、実に多くの方々物が故者になり、創立の理念を継続することは、限界になっていました。「赤い鳥の会」にこめられた坪田譲治先生方の理念が、今後どのように生きるのでしょうか。子どもの本の地下水脈になることを願い、私は、明日に向かって赤い鳥の本を手渡すことを心がけたいと思っています。

(おわり)

豊島区伝統工芸

豊島区伝統工芸保存会会員の皆様をご紹介します。

漆工芸

はしもと みつひろ
橋本 允宏さん



◆父の背中を追って

駅改良工事が進む椎名町駅の南口に降りて歩くことおよそ5分。南長崎の閑静な住宅街に漆工芸の伝統工芸士、橋本允宏さんの自宅兼工房がある。

工房に招き入れていただいた瞬間、

木と油が混ざったような、漆特有のにおいが漂ってくる。工房内を見渡すと、黒く塗られた木片が壁際に数多く立てかけられている。橋本さんは棟の化粧縁や、屏風の縁、額縁などに漆塗りを施す伝統工芸士だ。

小さい頃からものを作ることが好きで、将来は大工になると思っていた橋本さん。この道を志したきっかけは父だ。橋本さんが中学を卒業する頃、漆工芸職人の父が独立して今の南長崎の地に工房を構えた。

このとき父の道を継ぐことを決意し、夜間の高校に通いながら修業に励んだ。父は頑固でとても厳しく、「見て覚えろ」と言われ、事細かく教えてはくれなかったという。それでも「お客さんに気に入ってもらえるものを作りたい」という一心で、父の背中を必死に追った。そんな漆工芸の魅力について聞くと、「やはり仕上がりは美しすぎる。本物の漆は表面の艶が代用品の塗料とは全然違う」と言い切る。豊島区伝統工芸展のために作成したという硯箱を見せてもらうと、表面はまるで鏡のように天井を映し返している。

休日の過ごし方を聞くと「年末まで予定がぎっしりで、ゆっくり休みも取れそうにない」と橋本さん。趣味のアユ釣りもまだしばらくお預けになりそう。しかし、誇らしげに語る橋本さんの表情は充実感にあふれていた。父から子へ。時代は変わってもその技術と伝統は、この地で確かに受け継がれている。



千早図書館友の会主催・千早進歩自由夢月例会

※申込不要。当日、直接会場にお越し下さい。

◆千早進歩自由夢(1月例会・映画会)

日時 1月16日(日)午後1時～午後3時
 会場 千早図書館 2階 視聴覚室
 映画会 横山光輝アニメ「三国志」第6巻
 昨年7月に実施した横山光輝晩年の代表作であるアニメ「三国志」の続きの映画会を行います。子供から大人、お年寄りの方々まで、ふるとご参加ください。

◆千早進歩自由夢(2月例会・講演会)

日時 2月19日(土)午後1時半開場 午後2時開演～午後4時
 会場 千早図書館 2階 視聴覚室
 講演 演「豊島の女性史」
 講師 グループ風の交叉点／樋口 敏子・有泉 三起子 氏
 講演内容 「風の交叉点—豊島に生きた女性たち」の編集に携わった方から、千早地区を中心に豊島に生きた女性について語っていただきます。

◆千早進歩自由夢(3月例会・落語会)

日時 3月18日(金)午前9時半開場 午前10時開演～正午
 会場 千早図書館 2階 視聴覚室
 講演 演「落語会」 柳家 小せん師匠
 演 題 当日のお楽しみ
 3月の「千早進歩自由夢」は、毎年恒例の「落語会」を企画しました。今回は、昨年9月に真打ちに昇進された五代目・柳家小せん師匠にお願いしました。出し物は当日のお楽しみです。

豊島区子どもの読書に関する講習会 受講生募集

「読み聞かせ はじめの一步 また一步」

内容 子どもの成長にあわせて本の選び方や読み聞かせ方、集団への読み聞かせの方法などを、本の紹介を交えながらお話していただきます。

講師 児玉 ひろ美(こだま ひろみ)氏

※JPIC読書アドバイザー 公共図書館司書。

図書館・学校・幼稚園の職員研修、ボランティア養成講座などを通じて

子どもの読書環境を整える活動に従事。

厚生労働省社会保障審議会児童福祉文化財出版部門審議委員。

東京書籍「10代をよりよく生きる読書案内」[同：海外編]

平凡社「別冊太陽 心をつなぐ読み聞かせ」[同：続編]

いずれも共著。

日時 平成23年2月4日(金) 午前10時30分～12時30分

会場 あうるすぽっと 会議室B(豊島区東池袋4-5-2 ライズアリーナビル3階)

費用 無料

募集 70名

対象 豊島区内の幼稚園・小学校・児童館など教育・福祉施設で読み聞かせボランティアをしている方。また、子どもたちに向けた読み聞かせに関心のある豊島区民の方。

申し込み 平成23年1月15日(土) 午前10時より

中央図書館カウンターまたは電話にて申し込み

(先着順に受講者決定。定員に達し次第締め切り)

保育 あり(未就学児5名程度。事前申込が必要。先着順。)

問い合わせ 豊島区立中央図書館 児童・YAグループ 電話 03-3983-7861

図書館からの
お知らせ

図書館イベント情報

◆児童・あかちゃんおはなし会

毎週、おはなし会を開催し本の読み聞かせなどイベントを行っています。遊びに来てください。

主催/会場	おはなし会開催日		スペシャルイベント		
	幼児・小学生	あかちゃん	1月	2月	3月
中央図書館 児童コーナー	日曜日 午後2時	最終日曜日 午前11時	★9日・おはなしこうさく会 午後2時 ★15日・豊島岡女子学園によるおはなし会 午後2時 ★30日・ボランティア(虹のポケット)によるおはなし会 午後2時	★6日・おはなしこうさく会 午後2時 ★27日・ボランティア(池袋親子読書会)によるおはなし会 午後2時	★6日・おはなしこうさく会 午後2時 ★19日・豊島岡女子学園によるおはなし会 午後2時
駒込図書館 (駒込地域文化創造館)	土曜日 午後3時	—			
巣鴨図書館 地下会議室	水曜日 午後3時	最終水曜日 午前11時	★5日・ほんのじかんカルタ大会 午後3時 ★19日・ほんのじかんこうさく会 午後3時 ★26日・すがもこどもえいがかい 午後3時 「コギツネコンとこだめきボン」(21分)	★16日・ほんのじかんこうさく会 午後3時	★30日・すがもこどもえいがかい 午後3時 「小さなチャンピオン」(9分) 「にじのはしがかかるとき」(10分)
上池袋図書館 おはなしのへや (※は地下ホール)	水曜日 午後3時	最終水曜日 午前11時※	★12日・さくらんぼカルタ大会 午後3時※ ★26日・さくらんぼえいがかい 午後3時※ 「だるまちゃんととのこちゃん」(14分) 「ディズニーのうさぎとかめ」(9分)		★23日・さくらんぼえいがかい 午後3時※ 「クマのプーさん プーさんとちみみ」(26分) 「トム&ジェリー 透明人間」(7分)
池袋図書館 ワークルーム	土曜日 午後2時	—	★8日・たんぼぼカルタ会 午後2時	★26日・たんぼぼえいがかい 午後2時 「おやゆびひめ」(20分)	★12日・たんぼぼこうさくかい 午後2時 ★26日・たんぼぼえいがかい 午後2時 「わらぐつの中の神様」(23分)
目白図書館 地下区民集会室	水曜日 午後3時	第1水曜日 午前11時	★26日・めじろこどもシアター 午後3時 「大造じいさんとがん」(23分)	★23日・かきくけこうさくかい 「とびだすカードをつくろう!」 午後3時	★23日・めじろこどもシアター 午後3時 「みんなで作った虹のつり橋」(21分)
千早図書館 視聴覚室	水曜日 午後3時30分	水曜日 午前10時30分			

日程・会場等が変更になることがあります。事前にお問合せください。

図書館カレンダー

○は土日祝 ■は休館日

中央図書館							駒込・巣鴨・上池袋・池袋・目白・千早図書館							雑司が谷図書貸出コーナー						
開館時間							開館時間							開館時間						
平 日 午前10時～午後10時 土日祝 午前10時～午後6時							平 日 午前9時～午後7時 土日祝 午前9時～午後5時							平 日 午前10時～午後7時 土日祝 午前10時～午後5時						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
						①							①							①
②	③	④	5	6	7	⑧	②	③	④	5	6	7	⑧	②	③	④	5	6	7	⑧
⑨	⑩	11	12	13	14	⑮	⑨	⑩	11	12	13	14	⑮	⑨	⑩	11	12	13	14	⑮
⑮	16	17	18	19	20	21	⑮	16	17	18	19	20	21	⑮	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28	22	23	24	25	26	27	28	22	23	24	25	26	27	28
29	30	31					30	31						30	31					
			1	2	3	4				1	2	3	4				1	2	3	4
⑤	⑥	7	8	9	10	⑪	⑥	7	8	9	10	⑪	⑫	⑥	7	8	9	10	⑪	⑫
12	13	14	15	16	17	18	13	14	15	16	17	18	19	13	14	15	16	17	18	19
19	20	21	22	23	24	25	20	21	22	23	24	25	26	20	21	22	23	24	25	26
26	27	28					27	28						27	28					
			1	2	3	4				1	2	3	4				1	2	3	4
⑤	⑥	7	8	9	10	⑪	⑥	7	8	9	10	⑪	⑫	⑥	7	8	9	10	⑪	⑫
12	13	14	15	16	17	18	13	14	15	16	17	18	19	13	14	15	16	17	18	19
19	20	21	22	23	24	25	20	21	22	23	24	25	26	20	21	22	23	24	25	26
26	27	28	29	30	31		27	28	29	30	31			27	28	29	30	31		

編集後記

毎月、特集展示のテーマを考えていますが、テーマによって貸出数が変わってきます。たくさん貸し出されると、好評いただけたかなとうれしい気持ちになります。これからも皆様は借りたくなくなるようなテーマを考えていきます!(そ)

池袋図書館 臨時休館のお知らせ

期間：平成23年1月17日～2月14日

池袋図書館は、ICタグの導入と自動貸出機の設置工事を行なうため、臨時休館いたします。

期間中、館内の利用(区民集会室含む)及び池袋図書館の所蔵資料の貸出・予約はできません。ご利用の皆さまには大変ご迷惑をおかけしますが、ご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。

なお、池袋図書館に臨時窓口を下記のとおり開設いたします。

※データの読み書きができるICタグを資料に貼付し、資料データの入力作業を行ないます。

【臨時窓口】

期 間：平成23年1月18日(火)～2月13日(日)

※ただし、1月24日(月)、28日(金)、31日(月)、2月7日(月)を除く。

開設時間：平日9～19時 土日祝日9～17時

【臨時窓口で実施する業務】

○予約資料の貸出

○資料の返却

○予約受付(池袋図書館の所蔵資料を除く)、貸出延長

【お問い合わせ】 池袋図書館03-3985-7981

平成23年2月15日(火)から通常どおり開館いたします。